iquea に Tokharien et Koutchéen と題した長論文を掲げて、その中にこのトカラ語B種の名稱について從來の諸說を一々批評し、レヴィー氏やコノフ氏が近頃の論文に於て「吾々は第一言語B種、卽ちクチャにて話された言語に對しての古名が何と稱せられたかを知らない」と述べたが、それは彼等が私の既に日本語で發表した研究、さうして今日ではフランス文としても公けにせられてゐる研究を見逃した爲であり、この論文については、既に一九三一年の通報誌上に紹介したのであると前書きをして、以下すべて私のこゝに略述した所論を重ねて紹介して肯定し、A方言はトカラ語であり、B方言は Kučā (Küsän) 語であることを承認せねばならぬこと明瞭であると繰返して述べて居ります。

一九三四年以後の歐洲學界で、この問題がいかに扱はれてゐるかは、今の私の知り得ないところでありますが、思ふに多分この論斷によつて決定を見てゐることでありませう。果してそうであれば、ペリオ氏をしてこの問題に終止符を打たしめることになつたのは、彼が前述のやうに我が學界を重視して、常にその成績に深甚の注意を拂つてゐた結果に外ならぬと共に、言語の關係から、とかく世界に領會せられ難い我が學界の成績を廣く世界に紹介し、その注意をここに導くに至らしめた功は、吾々の氏に向つて感謝せねばならぬところと思ひます。これは單なる一例で、くり返して述べたやうに、我が國の先輩や同學諸氏の優れた研究の紹介に不斷の努力をしたことは、吾吾の牢記せねばならぬところであります。その代りあまり出來の善くない著述に對しては、思ひ切つた辛辣な批評をあびせかけて憚らず、よくその强い性格を發揮して居ります。

私の初めて彼と面接しましたのは大正九年九月私のパリを訪問した時のとこでありますが、その以前から文通し